

千葉県八千代市

# 新林遺跡 c 地点発掘調査報告書

- 共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 -



2007

岩 井 き み

八千代市遺跡調査会

## 序 文

八千代市は、「住宅団地発祥の地」として知られています。昭和30年代初頭における八千代台の町づくりを契機として住宅団地の造成が進み、首都30km圏に位置する住宅都市として成長を続けてまいりました。

昭和60年代以降、市域北部における大学と住宅地のセット開発が行われ、文教都市としての側面も併せ持つようになっています。また、京成電鉄に加えて平成8年4月には東葉高速鉄道が開業したこと、都心へのアクセスもさらに便利となり、沿線を中心とした新しいまちづくりが進み、県内の中堅都市として現在も発展し続けております。

このような状況のもと、八千代市遺跡調査会では、市内で行われる個人や民間企業の開発行為、土地区画整理事業などに先行する埋蔵文化財発掘調査に従事してまいりました。本報告書に掲載した調査は、市域の南東部に当たる上高野地区において計画された、共同住宅建設に先立つものです。この事業地については、平成9年度に埋蔵文化財の取り扱いについての照会があり、八千代市遺跡調査会が本調査を実施してまいりました。

新林遺跡は、今回報告するc地点をはじめ、a地点からe地点に亘る発掘調査が行われ、縄文時代を主に近世に至る豊富な内容をもち、当地域を代表する遺跡であることが判明いたしました。特に縄文時代中期後半の堅穴住居跡からは豊富な縄文式土器が出土し、八千代市内でも僅少の時期の資料だけに注目されます。そして、武藏野台地との関連を示す土器資料など、八千代市域の歴史を語るために欠くことのできない基礎資料を得ることができました。

本報告書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に興味をお持ちの皆様に大いに活用されれば幸いです。また、このことにより、地域の文化財保護についての関心を高めることになりますことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査の実施にあたり多大なご協力をいただいた事業者の皆様を初め、調査から整理までに種々ご指導をいただいた皆様に深く感謝いたします。また、調査や整理に従事された調査員、補助員の方々にも深くお礼申し上げます。

平成19年10月15日

八千代市遺跡調査会

会長 加賀谷 孝

## 凡　例

1. 本書は、千葉県八千代市上高野に所在する新林遺跡の、平成9年度に実施された発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、地権者である岩井きみ氏の委託を受け、八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。

3. 調査及び整理は以下のように実施した。

　調査期間 平成9年7月28日～平成9年8月13日（確認調査）

　平成9年9月1日～平成9年9月30日（本調査）

　整理期間 平成19年5月15日～平成19年10月31日（本整理）

4. 現地調査は、宮澤久史が担当し、本整理については中野修秀が担当した。

5. 本書の図版作成は、中野修秀、寺澤洋子、野中則子、見神光恵、山下千代子行い、遺物の写真撮影に関しては高屋麻里子が行い、編集・執筆は中野が担当した。ただし、第1章第1節は、宮澤久史が執筆した。

6. 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。

7. 採図の第1図の地形図は、八千代市発行の25,000分の1八千代市都市計画基本図を使用した。

8. 採図の第2図の地形図は、八千代市発行の2,500分の1八千代市都市計画基本図を使用した。

9. 遺構Noは、記号（アルファベット）と調査順の数字で表記した。記号は、原則として以下のとおりである。

　住居跡 D　土坑（ピット） P　溝 M

10. 各実測図の縮尺については、原則として下記のとおりである。これ以外は、適宜採図中に示した。

　堅穴住居跡 1/80　ピット 1/40　溝 1/80

11. 遺構実測図中のスクリーントーンは、特に指摘が無い場合は、以下のとおりである。

　■■■■ 焼土・火床 ■■■■ 織維土器・使用面

12. 住居跡平面図中の一点鎖線（— — —）は、床硬化面の範囲を表す。

13. 本書には、確認調査時に出土した遺物も掲載している。ただし、確認調査の結果に関しては、「平成9年度市内遺跡発掘調査報告書」において報告済みであるため、紙数の都合もあり、トレンチ毎の検出遺構数及び遺物出土数は載せなかった。バック資料としてのデータは、作成してあることを記しておくたい。

14. 採図の第2図には平成13年度本調査の遺構配置図を掲載している。ただし、その内容には一切触れないかった。それは、本来的には本書が後に刊行されるべきところを、諸般の事情で後になったからである。本書は既報告であるからといって、調査時点では知る筈のない未来の調査内容を、殊更に触ることは避けるべきである、というスタンスを探りたい。同様に、本書とほぼ同時期に刊行を予定している平成4年度本調査（a地点）に関しては、調査範囲をアミカケで示すのみとした。

　本書は、一冊を紐解くことによって、過去の調査履歴とその概要が全てわかるような、いわゆる「オール・イン・ワン」ではなく、平成9年度の調査内容が的確に把握できることを最重要視している。

15. 発掘調査から整理作業の間において、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力をいただきました。記して感謝いたします。

秋山利光　植田正子　長田京子　森　竜哉　千葉県教育庁文化財課　八千代市教育委員会

# 目 次

序文

凡例

目次

第1章	.....	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の方法と経過	1
第3節	遺跡の位置と周辺の歴史的環境	1
第4節	確認調査時の出土遺物	1
第2章	検出された遺構と遺物	6
第1節	縄文時代	6
(1)	堅穴住居跡	6
(2)	ピット	12
(3)	ピット及び遺構外出土遺物	23
第2節	縄文時代以降	26
(1)	溝	26
第3章	成果と課題	27
(1)	D1出土土器群の評価	27
(2)	「土器片埋葬」の提唱	28

報告書抄録



完掘状況（南南西から）

# 第1章 調査経過及び概要

## 1. 調査にいたる経緯

平成9年5月23日、八千代市上高野字新林1201-1ほかの土地について岩井きみ氏（以下、「事業者」という）から共同住宅建設に伴い、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が八千代市教育委員会（以下、「市教委」と略）に提出された。照会地は市遺跡No.233新林遺跡の範囲内であり、当該地での遺物散布状況、過去の隣接地及び周辺部での調査成果から、本照会地においても遺構が検出される可能性が高いと判断し、市教委は、事業者に対して、「遺跡有り」の回答を行い、開発にあたっては、発掘調査が必要となる旨を伝えた。その後、市教委と事業者の間で確認調査実施の為の協議が進められ、準備の整った平成9年7月28日から遺跡の正確や範囲を知るための確認調査が開始された。

確認調査は、市教委が平成9年度市内遺跡発掘調査事業として、国庫及び県費の補助を受けて実施した。期間は平成9年7月28日～8月13日の間で、その結果、縄文時代の堅穴住居跡2軒、土坑18基、時期不明の溝1条を検出した。この結果を踏まえ、千葉県教育委員会の指導の下、市教委は、開発区域の内800m<sup>2</sup>は引き続き協議が必要と判断し、その旨を事業者に通知した。

確認調査の結果を受け、協議範囲800m<sup>2</sup>について市教委と事業者間で再び協議が進められ、工事の及ばない330m<sup>2</sup>については現状保存を、そして工事が及ぶ470m<sup>2</sup>については埋蔵文化財の現状保存が困難との判断に至り、記録保存の措置として発掘調査を実施することとなった。このことを受け、市教委と八千代市遺跡調査会（以下、「調査会」と略）と事業者の間で埋蔵文化財の取り扱いをめぐる協定を締結し、更に調査会と事業者で本調査・整理作業に関わる委託契約を締結した。本調査は、以上の経緯から、調査会が市教委の指導の下、平成9年9月1日から実施することとなった。

## 2. 調査の方法と経緯

調査は、まずバックホーを用いて遺構確認面であるソフトローム上面までの表土除去を行った。この後全ての遺構の精査及び掘り下げは人力による。遺物の取り上げ及びピット平面図はトータル・ステーションを用い、土層断面図・エレベーション図及び堅穴住居跡の平面図は、手実測である。遺構などの写真撮影は、モノクロ及びカラーリバーサルとともに、プロニー判と35mmの両方を使用している。

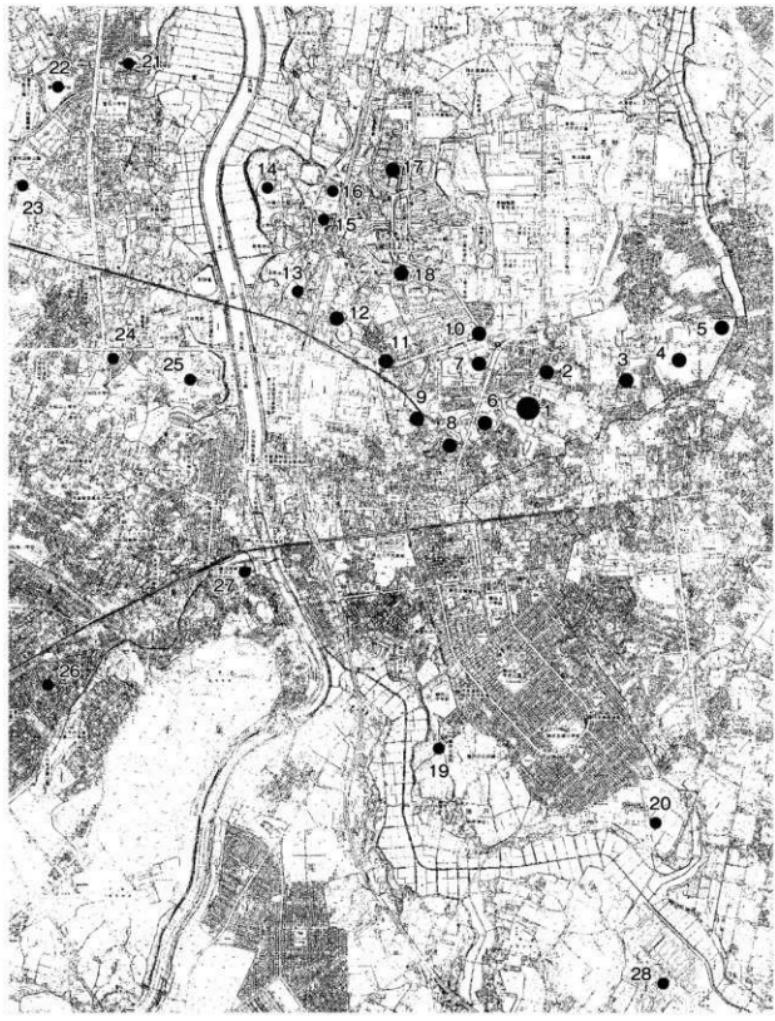
## 3. 周辺の歴史的環境

新林遺跡は、西を新川（谷）、東を小竹川（谷）によって開析された、標高約27m前後の台地（仮称村上台）に位置する。この村上台は、基部は勝田川の源流付近から、その北端は古鬼怒瀬（印旛沼）に臨み、神野支台・保品支台などが開析されている。第1図は新川谷の両側を中心として見たものである。村上台側は、辺田前・沖塚前低地及びその奥に開析された、仮称黒沢支谷を挟んだ両側に濃密な分布が見られ、本遺跡を含む上高野地区は調査例も多い。仮称麦丸台側は、萱田地区遺跡群及び川崎山遺跡などが所在する。高台向遺跡は行政区画では千葉市であるが、地理的には本地域と密接不離な関係にある。

## 4. 確認調査時の出土遺物（第3図）

確認調査の結果については、平成9年度の市内遺跡発掘調査報告書で報告済であり、詳細はそちらを参照されたい。本書では、確認調査時の出土遺物のうち、縄文式土器を紹介する。

1は前期前半黒浜式土器。地文縄文のみ。3～10は前期後半浮島・興津式土器。11は諸磯b式土器。地文縄文2段RL施文後、浮線を貼付し、キザミを施す。12～17は前期末葉の縄文系粗製土器。18は中期中葉阿玉台式土器。胎土に雲母細粒を含み、地文縄文2段RL。IV式か。19～22は中期後半加曾利E II式土器。23は連弧文土器。24は曾利系土器。25～28は後期前半堀之内式土器になるか。

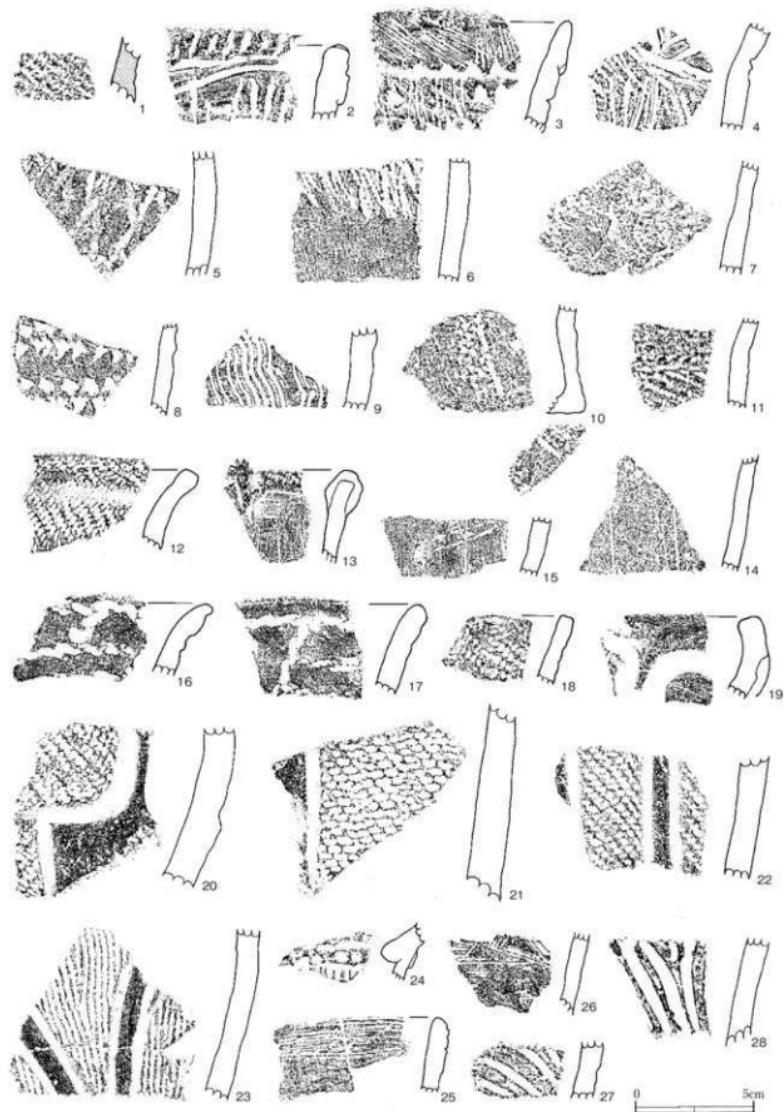


1 新林遺跡	2 二重堤遺跡	3 稲荷前遺跡	4 上谷津台南遺跡
5 上谷津遺跡	6 黒沢池上遺跡	7 黒沢台遺跡	8 台北側遺跡
9 沖塚遺跡	10 村上第一塚群	11 村上第二塚群	12 白筋遺跡
13 浅間内遺跡	14 待田遺跡	15 島内遺跡	16 墓作遺跡
17 村上向原遺跡	18 村上込の内遺跡	19 藤田大作遺跡	20 新東原遺跡
21 横現後遺跡	22 ラサル遺跡	23 坊山遺跡	24 池の台遺跡
25 川崎山遺跡	26 大畠入道跡	27 高台向遺跡	28 内野第一遺跡

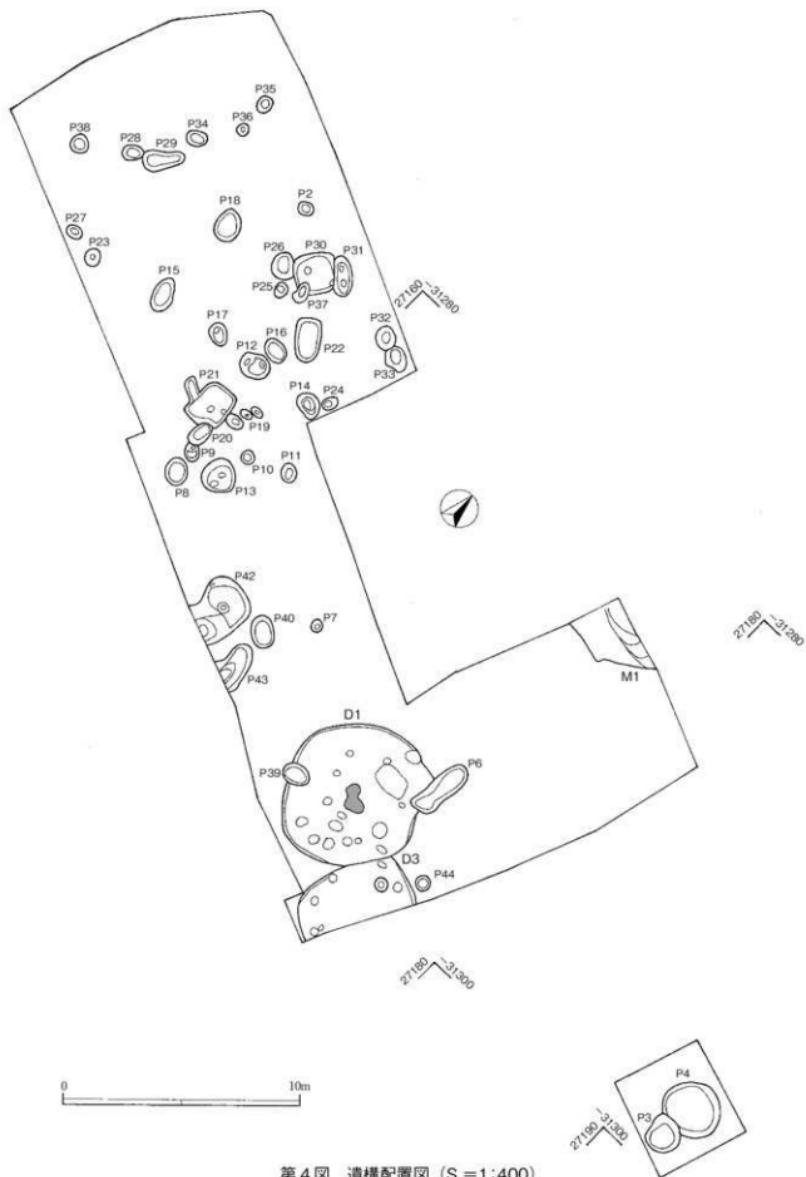
第1図 周辺の主な縄文時代の遺跡 (S = 1:25000)



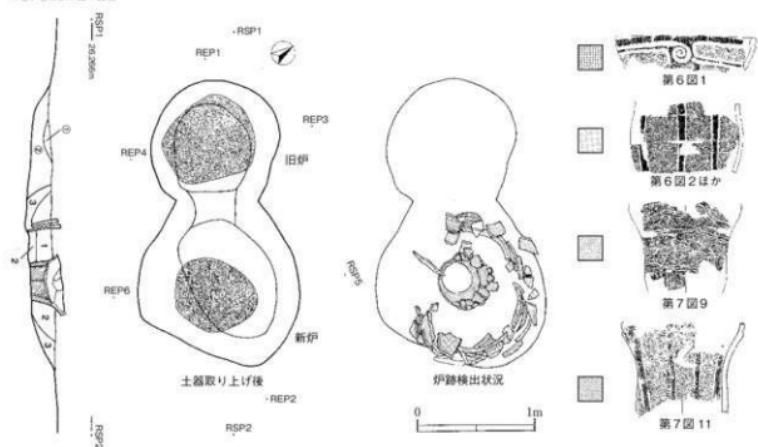
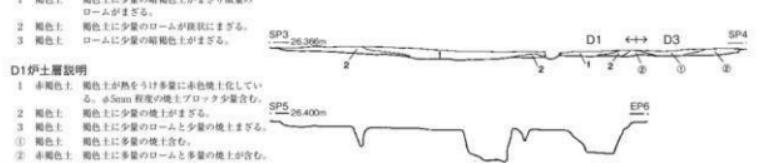
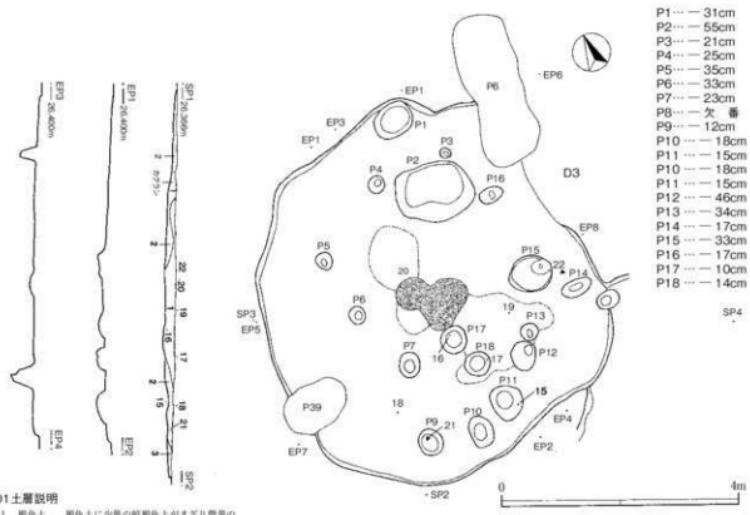
第2図 調査範囲及び事業範囲 (1:2000)



第3図 確認調査出土遺物



第4図 遺構配置図 (S = 1:400)



第5図 D1実測図

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 1. 繩文時代

今回の調査で竪穴住居跡2軒、ピット42基が検出された。以下の記載では、位置関係を示すグリッドは表記しないことにする。それは、確認調査では地形に即したグリッドを設定し、本調査のそれとは異なるからである。空間位置については、遺構配置図のX-Y座標から割り出していただきたい。

#### (1) 竪穴住居跡（第5図～第8図）

##### D1（第5図）

重複関係 D3を破壊する。平面形 やや不整な円形を呈する。規模 5.90m × 5.65m。遺構確認面からの深さ0.12m。壁 部分的に消失するが、残存部では比較的ゆるやかに立ち上がる。床 ソフトロームの直床。炉の周囲と中央南側がやや硬化している。壁溝 検出されていない。炉 ほぼ中央部に位置し、新旧2基。旧炉は地床炉で、火床部は焼けている。新炉は「土器片埋め壺炉」とでも呼ぶべきもので、掘り方の中央に小形深鉢の口縁部～胴上半部を埋設し、その周囲を4個体の大形深鉢を打ち欠いた土器片で囲っているものである。埋設土器の口縁部分は、ケロイド状になる程に熱を受けている。ピット 18本検出。主柱穴は認められない。貯蔵穴 P2はやや不整な隅丸長方形を呈し、底面は平坦気味で、貯蔵穴か。覆土 3層に分層できた。褐色土系からなる。遺物出土状態 覆土中に廃棄行為が認められる。特に集中することはない。建て替え 炉の作り替えのみである。

##### 出土遺物（第6図～第8図）

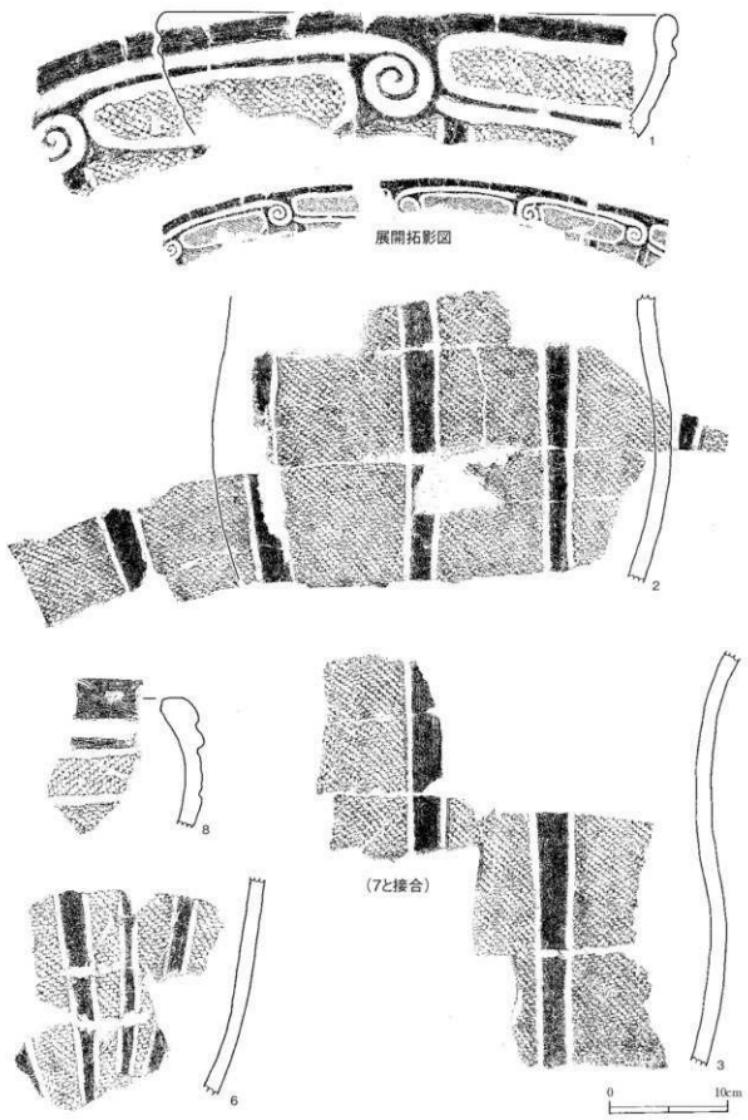
出土総数は276点で、うち212点をトータル・ステーションで取り上げた。

1～14は炉体土器。1はキャリバー形深鉢の口縁部。大きく2ピースに復元できたが、各々は接合しない。口縁部文様帶は、地文として縩文3段LRLを横回転で施文後、隆沈線で渦巻文（主文様）と格円形区画文（副文様）を描き、これを横位に連携するものである。現存部分では5単位が確認でき、欠失部分を考慮すると、主文様は6単位施されていたと思われ、うち一つは單なる円形区画文となっており、この部分が背面である可能性が高い。その場合、欠失した1単位こそが、これに対応する正面であったということになる。頸部文様帶はなく、口縁部文様帶のヨコ一次区画文に接して、胴部文様帶が施される。胴部文様帶はほとんど残存していないが、地文縩文3段LRL施文後、縦位の磨消懸垂文を施文するものである。文様の方位形態は口縁部がヨコ、胴部がタテで、この構成原理を遵守している。

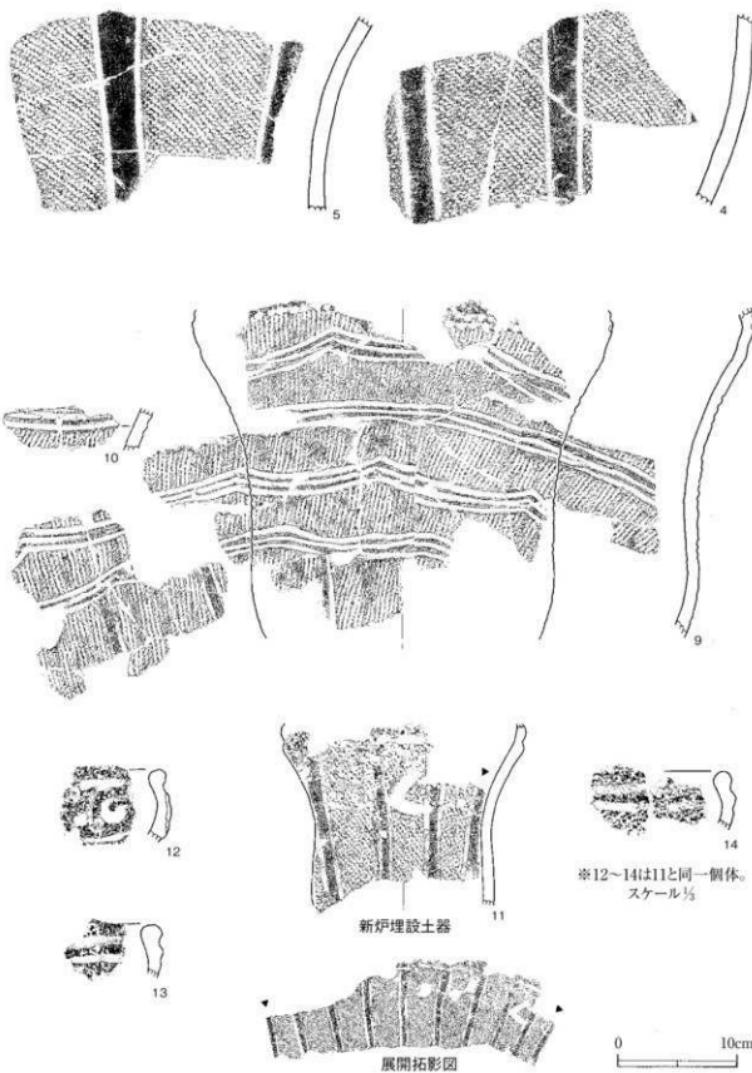
2～5は同一個体。大形キャリバー形深鉢の胴上半～胴下半である。頸部はやや外反気味に立ち上がり、胴中位がやや膨らむ形となる。胴部文様帶は、縩文3段LRLを縦回転で施文後、縦位の磨消懸垂文を施文する。全周した資料はないので何とも説明し難いが、6ないし8単位程度であった可能性が高い。本例は接合を徹底して行ったため、器形その他は解明できたが、炉を構成する部材としての復元はできなくなってしまった。この点は甚だ遺憾である。2～5のいずれもが意図的に毀損され、「部材」として転用されていた。2は少なくとも6ピースに分割され、破片の角が磨られて丸くなっているものもある。そのため各々は接合しない。「部材」たる所以である。3と7は接合したため3として扱う。

6・8は同一個体。大形キャリバー形深鉢の、口縁片及び胴下半部の破片である。口縁部文様帶は、地文として縩文3段LRLを横回転で施文後、隆沈線で区画文を構成する。胴部文様帶は、縩文3段LRLを縦回転で施文後、縦位の磨消懸垂文を施文する。本例は底部付近のため、懸垂文の末端が近接してきており、かつ幅も一定しておらず、やや乱れた印象を与える。

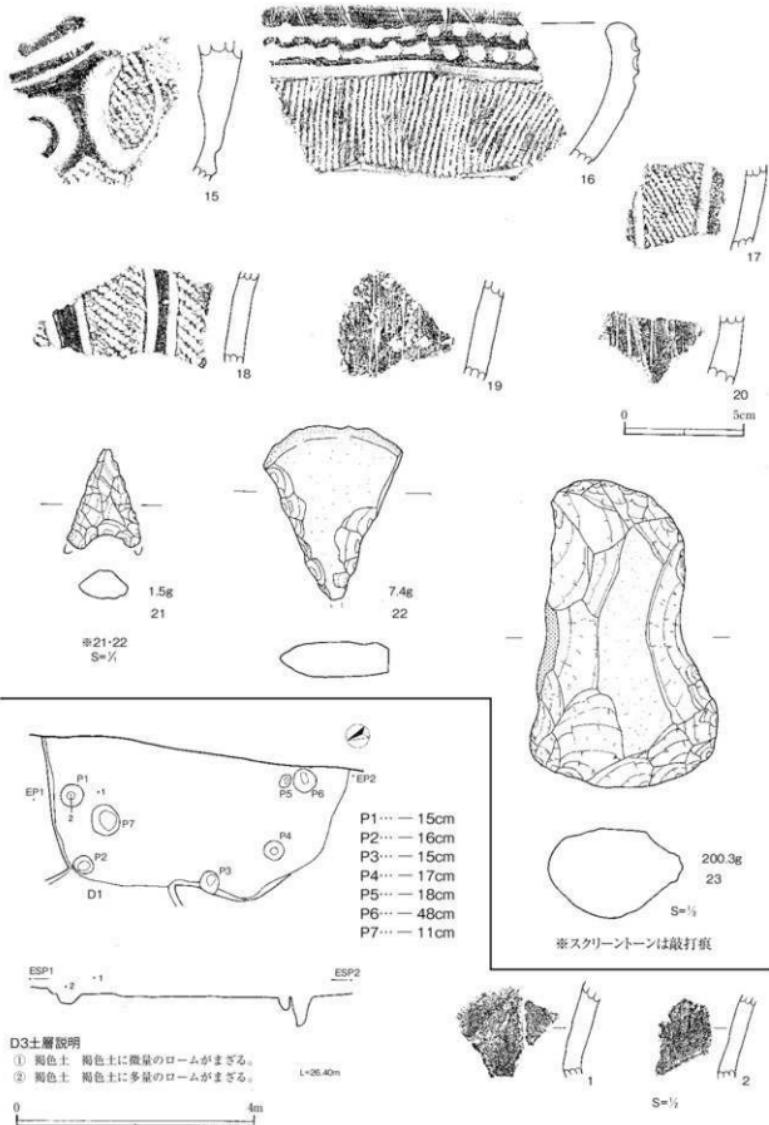
9・10は同一個体。連弧文土器の深鉢で、口辺～胴下半である。器形的にはキャリバー形深鉢に近いが、頸部の外反がやや強く、口縁は短く内傾気味に立ち上がる点が異なる。やや太目の撚糸Lを地文とし



第6図 D1出土遺物（1）



第7図 D1出土遺物（2）



第8図 D1出土遺物（3）・D3実測図

て施文後、文様は口縁部・頸部・胴部文様帶の三帯構成をとる。口縁部文様帶は、円形竹管を施文具とした交互刺突文である。頸部文様帶は、3本1組の描線による2段の連弧文であるが、下段は平行沈線に近く、施文効果的には胴中位のヨコ一次区画文化している。胴部文様帶は、3本1組の描線による2段の連弧文と、下段の連弧文から垂下した磨消懸垂文の構成となる。その結果、上段の連弧文が副文様的な効果を醸し出している。本例も「部材」として転用されていたため、大きくは3ピース、小片を含めて5ピース以上に分割されており、破片の角が磨られて丸くなっているものも多い。そのため、各々は接合しないものがほとんどで、接合した場合も、その接合面は極めて狭小である。

11~14は同一個体。小形キャリバー形深鉢の口縁部～胴中位である。12~14は、11の口縁部であるが、炉の埋甕として使用され、その熱で表面がケロイド状となり欠損したもので、接合はできなかった。不鮮明ながら口縁部文様帶は、地文繩文を施文後、隆沈線で主文様の渦巻文と、副文様の楕円形区画文を構成していたことが、辛うじてわかる。胴部文様帶は、繩文3段LRLを縱回転で施文後、縱位の磨消懸垂文を施文する。本例は全周するため、胴部の懸垂文は9単位施されていることが判明した。挿図は▼が起点と終点となるように作成したので、一つ多くなっているが、本来は9単位である。

15~22は覆土中の出土。15はキャリバー形深鉢の口縁部。小波状をなしており、波頂部を欠損する。口縁部文様帶は、繩文3段LRLを施文後、隆沈線により円形区画文及び渦巻文などを描くもので、一段ではなく、複数段が施されているようである。ティビカルな加曾利EII式土器である1~11と比較した場合、区画文を重疊施文する点など、やや逸脱した観があり、大木9式土器のテイストが感じられる。

16は連弧文土器の口縁部。燃糸Lを地文として施文後、口縁部文様帶は、平行沈線の間に円形竹管を施文具とする交互刺突文を充填する。本例は頸部文様帶の連弧文の上端が残存する。

17~18はキャリバー形深鉢の胴部片。ともに繩文3段LRLを縱回転で施文後、縱位の磨消懸垂文を施文する。18は15と同一個体で、意図的に懸垂文の幅を変えている。これは、懸垂文にも「主・副」の関係が認められる可能性を示唆するものである。

19~20は条線文系粗製土器の胴部片。19は条線を縱位に施す。20はややランダムな施文である。

21~23は石器。23は確認調査時点の出土遺物であるが、D1に該当するトレンチから出土しており、間接的なことは否めないものの、その帰属を同住居跡と判断した次第である。

21は剥片石器で、石鎚。両方の脚部の先端をわずかに欠損する。無茎凹基式。

22は剥片石器で、石錐。側縁を中心に剥離が見られる。先端部を欠く。

23は礫石器で、打製石斧。本例はほぼ完品。分銅形か撥形か決めかねる形状をなす。楕円形かつ扁平な礫を素材とし、側縁と刃部側から剥取して製作したものである。括れ部の表裏面に敲打痕が認められるが、これは着柄に際しての利便性を高めるためと思われる。砂岩製。

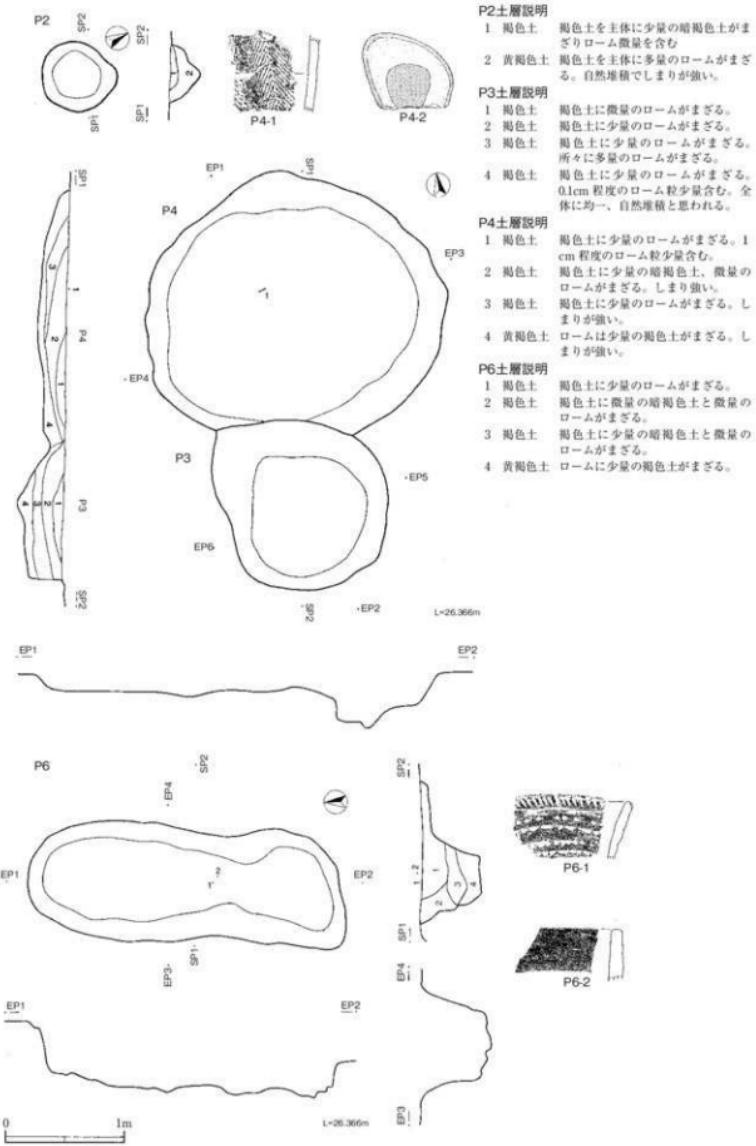
#### D3(第8図)

重複関係 D1の破壊を受ける。平面形 円形を基調とする。規模 5.25m × (1.23) m, 遺構確認面からの深さ0.12m。壁 部分的に消失するが、残存部では比較的垂直に立ち上がる。床 ソフトロームの直床。顯著な硬化範囲は認められない。壁溝 検出されていない。炉 調査部分からは検出されていない。ピット 7本検出。いずれが主柱穴になるかは不明。貯蔵穴 検出されていない。覆土 2層に分層できた。ほとんど褐色土系からなる。遺物出土状態 わずか2点の出土である。廃棄の可能性が高いが、本跡は覆土の残存土量そのものが僅少で、断定はできない。建て替え 認められなかった。

#### 出土遺物（第8図）

出土総数は2点で、うち2点をトータル・ステーションで取り上げた。

1~2は同一個体。胴下半の無文部の資料で、内外面ともに器面調整痕のみ。前期後半と思われる。



第9図 ピット実測図

(2) ピット (第9図～第14図)

P2(第9図)

重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 略円形。 壁・底面 壁は垂直気味で、底面に向かって先すばまり状となる。規模 0.64m×0.60m。検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 2層に分層でき、自然堆積である。遺物 出土しなかった。

P3(第9図)

重複関係 P4と重複関係がある。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部ともやや不整な円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は比較的凹凸に富む。規模 1.43m×1.41m。検出面からの深さは0.42mを測る。覆土 4層に分層でき、褐色土系で、自然堆積である。遺物 出土しなかった。

P4(第9図)

重複関係 P3と重複関係がある。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。 壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、横断面形はタライ状。規模 2.56m×2.24m。検出面からの深さは0.24mを測る。覆土 4層に分層でき、褐色土主体で、下層はしまり強い。遺物 繩文式土器2点及び石器1点が出土した。性格 五領ヶ台式期の堅穴状遺構と思われる。

P6(第9図)

重複関係 D1と重複関係がある。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも不整梢円形。 壁・底面 壁は垂直気味で、底面は凹凸に富む。規模 2.71m×0.98m。検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 4層に分層でき、褐色土主体。遺物 繩文式土器4点が出土。

P7(第10図)

重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。 壁・底面 壁は垂直気味で、底面に向かってやや先すばまり状。規模 0.49m×0.48m。検出面からの深さは0.38mを測る。覆土 5層に分層でき、下層は黄褐色土主体。遺物 繩文式土器2点が出土。

P8(第10図)

重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。 壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや凹凸に。規模 1.07m×0.94m。検出面からの深さは0.16mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器5点が出土。

P9(第10図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも不整円形。 壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面にテラスを一段有する。規模 0.68m×0.62m。検出面からの深さは0.27mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器5点が出土。

P10(第10図)

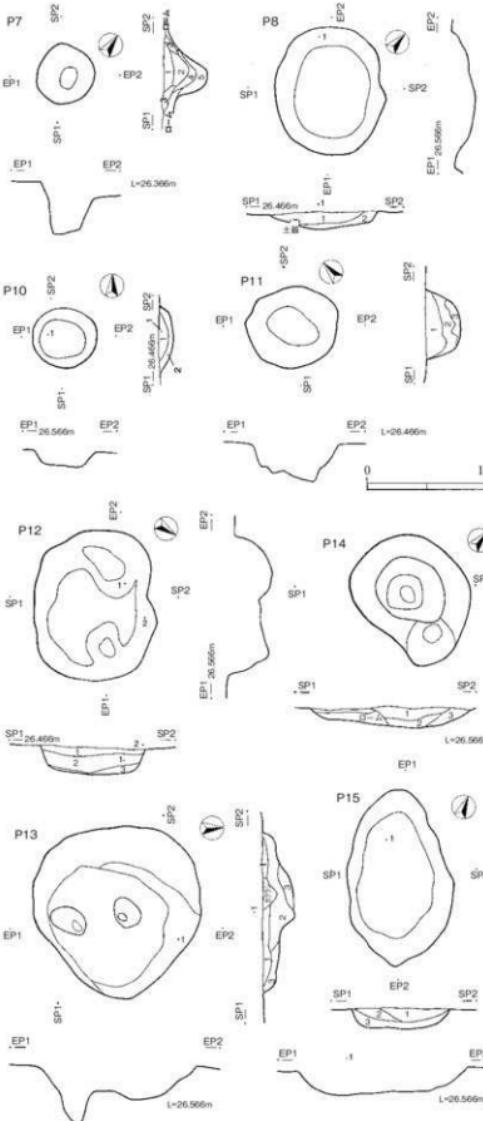
重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。 壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.54m×0.51m。検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器1点が出土。

P11(第10図)

重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも不整円形。 壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや凹凸に富む。規模 0.77m×0.70m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土主体。遺物 出土しなかった。

P12(第10図)

重複関係 P16と接している。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも不整梢円形。 壁・底面



P7土層説明

- 1 褐褐色土 褐色土は少量の暗褐色土。少量のローム。
- 2 褐色土 褐色土に少量のローム微量の暗褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。
- 4 褐褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 5 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。

P8土層説明

- 1 褐色土 褐色土に微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。

P10土層説明

- 1 褐色土 褐色土に微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。

P11土層説明

- 1 褐色土 褐色土に多量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざり、ロームブロック少許含む。

P12土層説明

- 1 褐色土 褐色土に多量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。

P13土層説明

- 1 褐色土 褐色土に多量のロームがごちゃごちゃにまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。耐性しまりが強い。

P14土層説明

- 1 褐色土 褐色土に少量の暗褐色土、少量のロームがまざる。
- 2 褐色土 褐色土に多量のロームがまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。しまりが強い。

P15土層説明

- 1 褐色土 褐色土に少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の暗褐色土がまざる。

第10図 ピット実測図（2）

壁は垂直気味で、底面はテラスを有し、両端がピット状にくぼむ。規模 1.27m × 1.04m。検出面からの深さは0.25mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土主体。遺物 繩文式土器2点が出土。

P13(第10図)

重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも不整円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面に小ピット2本を穿っている。規模 1.46m × 1.40m。検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土主体で、下層はしまりがある。遺物 繩文式土器2点・石1点が出土。

P14(第10図)

重複関係 P24と接する。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部とも不整梢円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面にピット状のくぼみを有する。規模 1.13m × 0.93m。検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 3層に分層でき、褐色土を主体で、下層はしまっている。遺物 繩文式土器2点が出土した。

P15(第10図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整梢円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや凹凸が目立つ。規模 1.51m × 0.91m。検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土主体で、下層は粘性あり。遺物 繩文式土器3点が出土。

P16(第11図)

重複関係 P12と接する。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部円形、底部梢円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は比較的平坦である。規模 1.03m × 0.72m。検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P17(第11図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部円形、底部とも梢円形。壁・底面 壁はほぼ垂直で、底面はテラスを有し、一端がピット状にくぼむ。規模 0.97m × 0.68m。検出面からの深さは0.33mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P18(第11図)

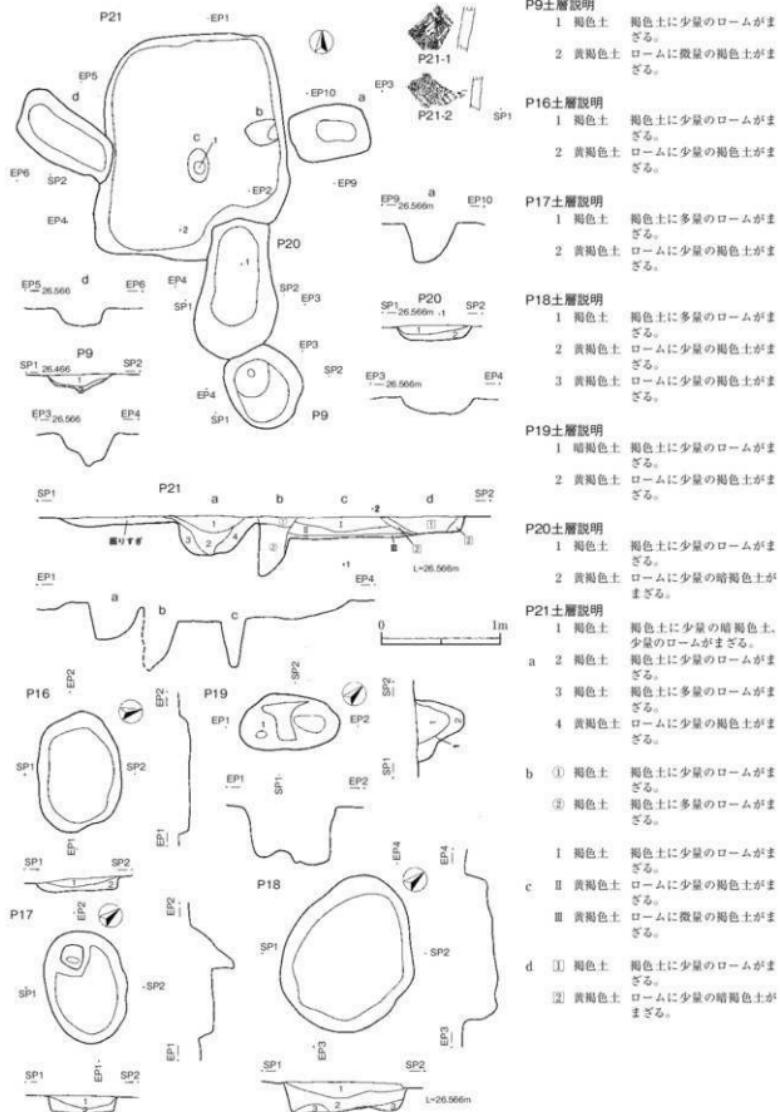
重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部とも不整梢円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや凹凸が目立つ。規模 1.36m × 1.09m。検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土主体で、しまりに富む。遺物 出土しなかった。

P19(第11図)

重複関係 P21と接する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも梢円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はテラスを有し、両端が深くなる。規模 0.85m × 0.48m。検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器及び石各1点が出土した。性格 本跡は柱穴で、柱材が腐朽したなどの理由で抜去し、近接して新たな掘り方を掘り直したものである。従って、中央が最も古く、都合二回の掘り直しが認められる。ただし、何に伴う柱穴かは不明としておく。

P20(第11図)

重複関係 P9・P21と接している。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部とも梢円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや凹凸が有る。規模 1.18m × 0.68m。検出面からの深さは0.14mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器1点が出土。備考 本跡はP9及びP21の2基の遺構と重複する。完掘状況から、P9よりは新しい可能性が高い。また、P21の南東コーナーが、本跡を避けるように内側へ屈曲している点から見て、同跡の掘削は本跡よりも後と捉える方が自然と思われる。



第11図 ピット実測図（3）

P21(第11図)

重複関係 P20と重複関係がある。長軸 ほぼ北-南。平面形 a 條円形、b 不整円形、c やや不整な隅丸方形、d 條円形。壁・底面ともに壁は垂直気味で、底面は比較的平坦であるが、aは底面に向かってやや先すぼまり気味となる。規模 a 0.67m × 0.46m、深さ0.34m、b 0.27m × 0.22m、深さは不明、c 1.93m × 1.66m、深さ0.17m、d 0.87m × 0.47m、深さ0.15mを測る。覆土 aは4層に分層でき、暗色土系、bは2層に分層でき、褐色土系、cは3層に分層でき、黄褐色土系で、dは2層に分層できた。遺物 主としてcから、縄文式土器4点が出土した。備考 本跡は土坑3基と、その内部施設に分解できる。即ち、a・dは各々が単独の土坑で、bは竪穴状遺構であるcの内部施設である。

P22(第12図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも條円形。壁・底面 南壁は垂直気味で、底面は比較的平坦。規模 1.84m × 1.04m、検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 4層に分層でき、褐色土系が主体である。遺物 縄文式土器3点が出土。

P23(第12図)

位置 G9-34グリッド。重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも不整円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸底状。規模 0.72m × 0.62m、検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P24(第12図)

重複関係 P14と接する。長軸 ほぼ北北東-南南西。平面形 上部、底部とも不整條円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや先すぼまり状となる。規模 0.62m × 0.54m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P25(第12図)

重複関係 P26と接する。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも不整円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯び、鍋底状。規模 0.58m × 0.54m、検出面からの深さは0.23mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P26(第12図)

重複関係 P25と接する。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部円形、底部條円形。壁・底面 壁は垂直気味で、横断面形は丸底状となる。規模 1.16m × 0.90m、検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 縄文式土器1点が出土。P30・31・37と接合する。

P27(第13図)

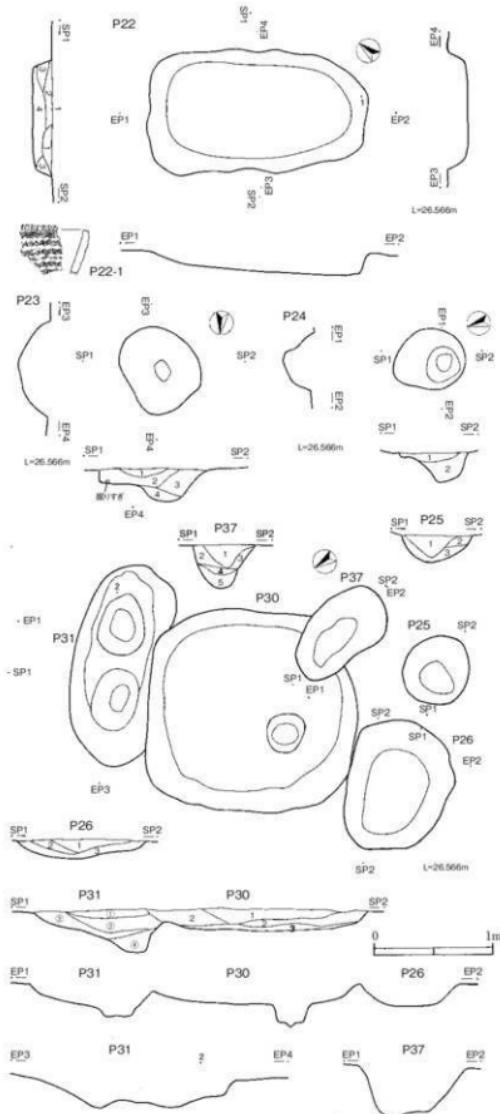
重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面に向かって先すぼまり状となる。規模 0.62m × 0.50m、検出面からの深さは0.28mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P28(第13図)

重複関係 P28と接する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも條円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや凹凸を有する。規模 0.78m × 0.62m、検出面からの深さは0.13mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P29(第13図)

重複関係 P28と接する。長軸 ほぼ北東-南西。平面形 上部、底部とも長條円形(糸瓜形に近い)。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面はやや凹凸に富む。規模 1.75m × 0.84m、検出面からの深さは0.10mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。



P22土層説明

- 1 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 3 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。粘性つよい。
- 4 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。

P23土層説明

- 1 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。しまりつよい。
- 4 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。

P24土層説明

- 1 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。

P25土層説明

- 1 黄褐色土 地色土に少量の褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。しまりつよい。

P26土層説明

- 1 黄褐色土 地色土に少量の褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。

P30土層説明

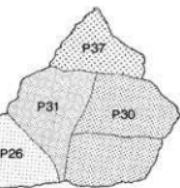
- 1 黄褐色土 地色土に少量の褐色土、少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。

P31土層説明

- ① 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- ② 黄褐色土 地色土に微量のローム、微量の褐色土がまざる。
- ③ 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。
- ④ 黄褐色土 ロームに微量の褐色土がまざる。

P37土層説明

- 1 黄褐色土 地色土に少量の褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 3 黄褐色土 地色土に少量のローム、微量の褐色土がまざる。
- 4 黄褐色土 地色土に少量のロームがまざる。
- 5 黄褐色土 ロームに少量の褐色土がまざる。2期にまたがって埋った坑のようである。



上の遺物の接合状況

第12図 ピット実測図 (4)

P30(第12図)

重複関係 P31を破壊し、P37と重複する。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも隅丸方形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は概ね平坦で、小ピット1本を穿っている。規模 1.70m × 1.67m。検出面からの深さは0.18mを測る。覆土 3層に分層できた。遺物 繩文式土器5点が出土。この中には、P26・31・37と接合する個体が含まれる。備考 本跡は竪穴状遺構と思われる。

P31(第12図)

重複関係 P30の破壊を受ける。長軸 ほぼ西北西－東南東。平面形 上部、底部とも梢円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面にはピット状のくぼみが2個所穿たれる。規模 1.70m × 0.82m。検出面からの深さは0.36mを測る。覆土 4層に分層できた。遺物 繩文式土器5点が出土。この中には、P26・30・37と接合する個体が含まれる。

P32(第13図)

重複関係 P33と接する。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸底状。規模 0.97m × 0.85m。検出面からの深さは0.34mを測る。覆土 3層に分層でき、暗色土系。遺物 出土しなかった。

P33(第13図)

重複関係 P32と接する。長軸 ほぼ北西－南東。平面形 上部、底部とも不整梢円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は二段状となる。規模 1.06m × 0.82m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 3層に分層でき、黄褐色土系である。遺物 繩文式土器1点が出土。

P34(第13図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ東北東－西南西。平面形 上部、底部とも梢円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる。規模 0.85m × 0.62m。検出面からの深さは0.12mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P35(第13図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西－南南東。平面形 上部、底部とも不整梢円形。壁・底面 壁はゆるやかに立ち上がり、底面は二段状となる。規模 0.73m × 0.54m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P36(第13図)

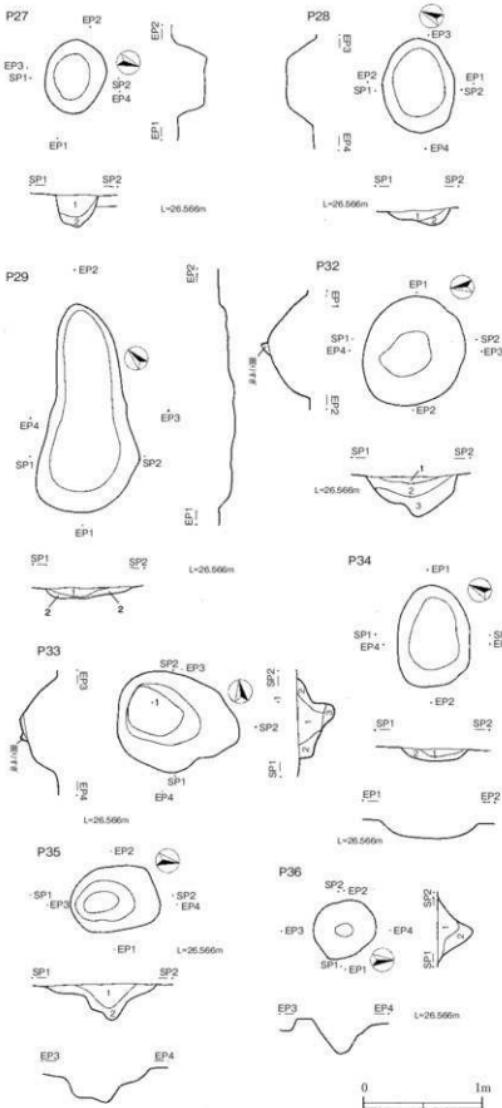
重複関係 単独。長軸 ほぼ円形なので、なし。平面形 上部、底部とも円形。壁・底面 壁は底面に向かって先ずはまり状となる。規模 0.53m × 0.48m。検出面からの深さは0.32mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 出土しなかった。

P37(第12図)

重複関係 P30と重複関係がある。長軸 ほぼ北－南。平面形 上部、底部とも不整梢円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面はやや凹凸を有する。規模 0.93m × 0.56m。検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 5層に分層できた。遺物 繩文式土器1点が出土。P26・30・31と接合する。これは、毀損した破片を別々に廃棄したか、ある時点で土中に包含されていた土器片が、土坑群の掘削によって小片化し、それらが遺構の埋没に伴って覆土中に流入したか、幾つかのケースが想定可能である。

P38(第14図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。壁・底面 壁は垂直気味で、底面は丸みを帯びる。規模 0.72m × 0.72m。検出面からの深さは0.20mを測る。覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器1点が出土。



#### P27土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

#### P28土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

#### P29土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、少量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

#### P30土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 暗色土 暗色土に少量のロームがまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

#### P31土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の暗褐色土がまざる。

#### P32土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 暗色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。
- 3 黄褐色土 ロームに微量の暗褐色土がまざる。

#### P33土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

#### P34土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量のロームがまざる土。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる土。

#### P35土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

#### P36土層説明

- 1 暗色土 暗色土に少量の暗褐色土、微量のロームがまざる。
- 2 黄褐色土 ロームに少量の暗褐色土がまざる。

第13図 ピット実測図（5）

P39(第14図)

重複関係 D1と重複関係がある。長軸 ほぼ西-東。平面形 上部、底部ともに楕円形 壁・底面  
壁は垂直気味で、底面は概ね平坦である。規模 1.13m×0.82m、検出面からの深さは0.23mを測る。  
覆土 2層に分層できた。遺物 繩文式土器1点が出土。

P40(第14図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北西-南東。平面形 上部、底部とも楕円形。壁・底面 壁は垂直気  
味で、底面は凹凸に富む。規模 1.34m×0.93m、検出面からの深さは0.37mを測る。覆土 3層に分  
層でき、褐色土主体である。遺物 出土しなかった。

P42(第14図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北-南。平面形 上部、底部ともに不整形。強いて例えるのであれば、「舌状」か。壁・底面 壁は部分で大きく異なり、一定の形状を示さない。概ね東壁側は垂直気味で  
あるが、西壁側では自然、かつゆるやかに立ち上がる。底面は大きく二つのピット状を呈する。そのうち北側のものは、2本の小ピットを穿っており、中央付近のピットへ向かって底面全体が傾斜している。  
南側のものは、底面にやや凹凸が目立つ。規模 2.54m×2.16m、検出面からの深さは0.48mを測る。  
覆土 6層に分層できた。土層断面で見る限り、北側中央のピットを埋めてゆくように、全体が擂鉢状の  
崖地を経て、完全埋没したことがわかる。覆土自体は、全体に粘性が強い。遺物 繩文式土器9点が  
出土した。これらは、覆土の3層中からの出土がほとんどである。時期的には、前期後半～中期初頭ま  
でを含んでいる。

備考 本跡はプラン確認の段階で落ち込みを検出し、調査当初はD2とされていた遺構で、規模が大き  
く、遺物の出土も目立つ。形状その他から、竪穴住居跡ではないとの判断が下された訳である。代案  
は考慮してはいないが、遺物の出土層位もほぼ限られており、少なくとも埋没の経緯に関してはヒント  
がある。掘削の目的や用途は不明であるとはい、遺構と認定する必要がありそうである。

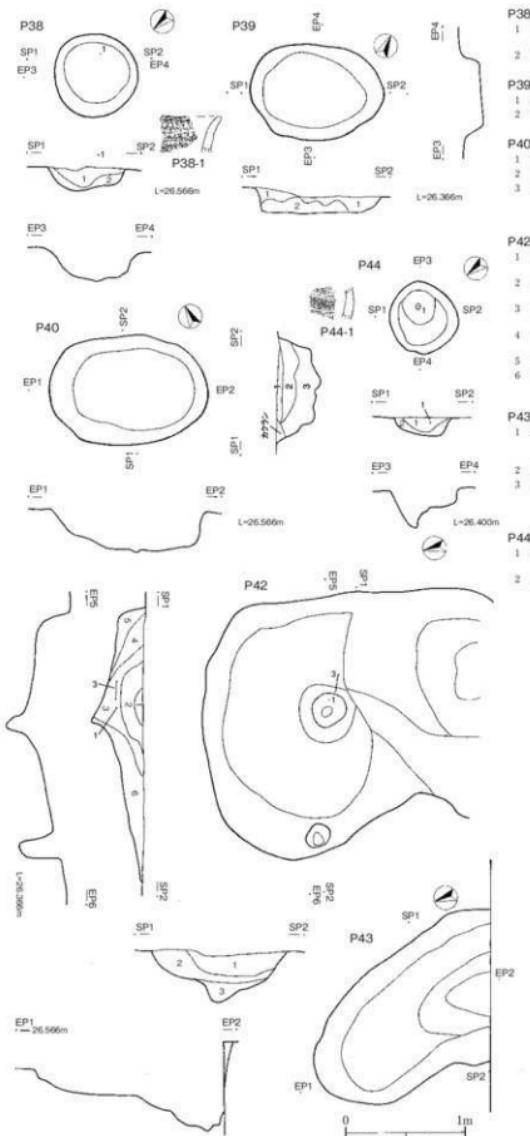
P43(第14図)

重複関係 単独。長軸 ほぼ北北西-南南東。平面形 上部、底部ともに不整形。強いて例えるのであれば、「舌状」か。壁・底面 壁は部分で異なり、一定の形状を示さない。南側の調査区境付近で  
は垂直気味であるが、北壁側では自然、かつゆるやかに立ち上がる。底面は凹凸を有し南側へ向かって  
深さを増している。規模 2.04m×1.20m、検出面からの深さは0.48mを測る。覆土 3層に分層でき、  
褐色土主体である。最下層はしまり強い。遺物 出土しなかった。

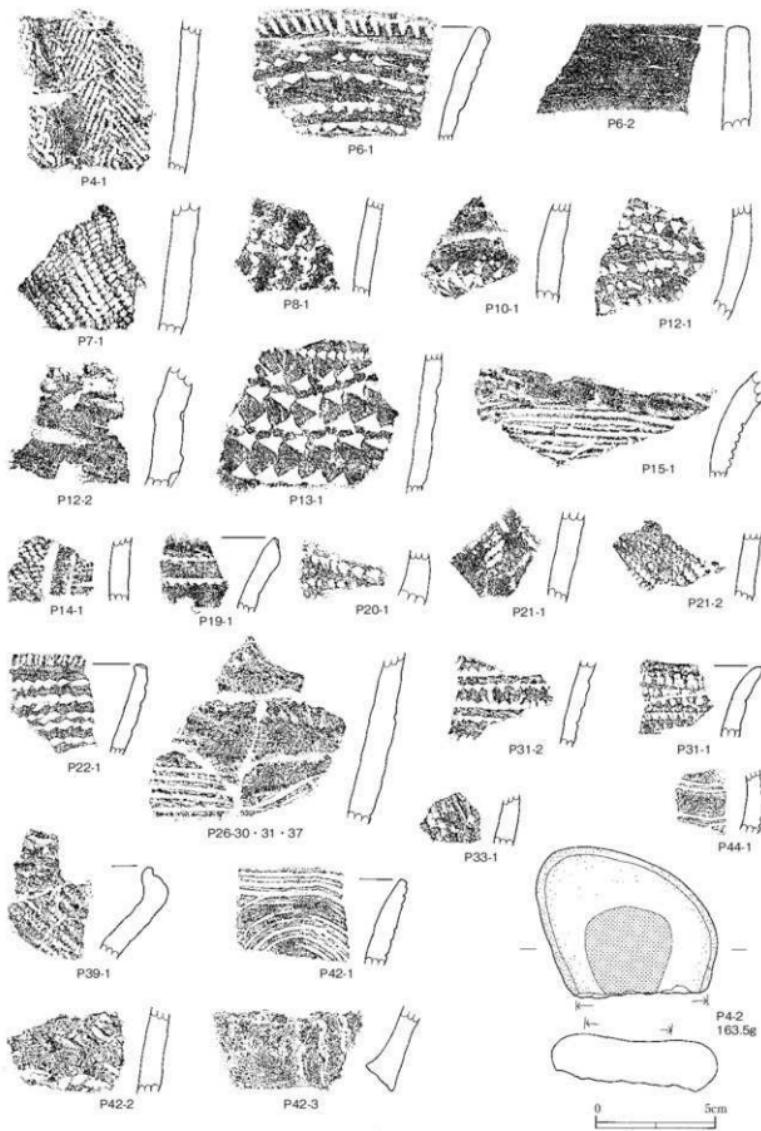
備考 本跡も上記のP42同様に、プラン確認の段階で落ち込みを検出し、調査当初はD2とされてい  
た遺構で、規模が大きい。結局のところ、形状その他から、竪穴住居跡ではないとの判断が下された訳  
である。D2は最終的に2基の土坑群となったが、調査当初は一つの遺構と見られていたように、両者  
の覆土最上層、あるいは埋没後に上を覆った土の内容が近似していたものと思われる。間接的に、これ  
は両者の埋没完了が時間的に近いということを示唆するものである。本跡は、P42と比較して形状が不  
整形で、かつ遺物の出土もなく、遺構としての判断材料は極めて乏しいものの、「同じ頃に埋没した（し  
ていた）穴」という認識は持つ必要がある。時間軸の同時性のみを頼りにして、「not only, but also」  
式な解釈を下すのは、些か科学的ではないが、両者を無関係と判断する根拠もまた、見当たらない。

P44(第14図)

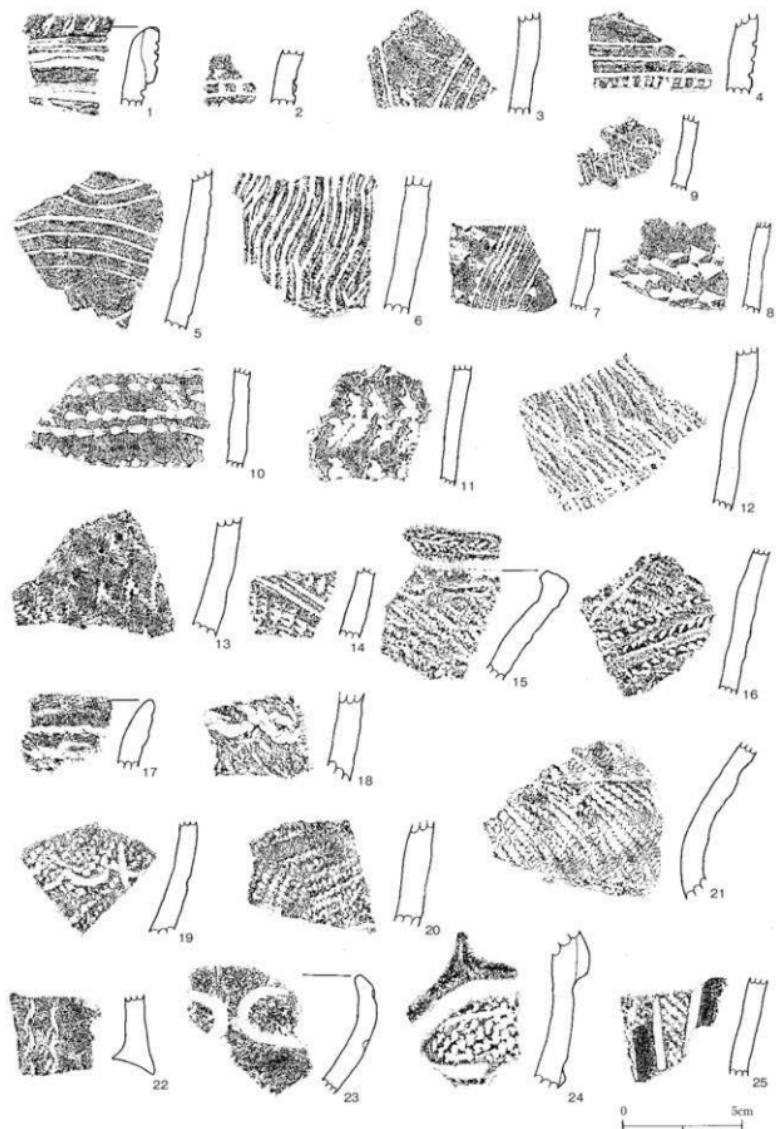
重複関係 単独。長軸 円形なので、なし。平面形 上部、底部とも略円形。壁・底面 壁は垂直  
気味で、底面はやや凹凸を有する。規模 0.84m×0.76m、検出面からの深さは0.29mを測る。覆土 4  
層に分層でき、暗褐色土系で、しまりに富む。遺物 繩文式土器1点が出土。



第14図 ピット実測図（6）



第15図 ピット出土遺物



第16図 遺構外出土遺物

### (3) ピット及び遺構外出土遺物（第15・16図）

#### ピット出土遺物（第15図）

P4 1は縦位に結節縄文を施した胴部片で、胎土に長石・雲母・石英粒を含む。五領ヶ台式土器。2は自然縫の片面に浅く窪んだ使用面を有する石器。極小の石皿のような印象を受ける。本体の欠損面にも、敲打痕などの転用時点での使用面が見られる。砂岩製。

P6 1は口縁部に斜位の条線帯、以下は三角文を重疊施文する。浮島Ⅲ式土器である。2は器内外面が調整痕のみの口縁片。口縁は直上して立ち上がり、中期の可能性があるが、現状では不明としたい。

P7 1は縄文2段RLを施した胴部片。加曾利E式土器（細別は不明）である。

P8 1はフネガイ科の貝殻を施文原体として用い、その復縁で波状貝殻文を施した胴部片。

P10 1はP7と同様の施文。ともに施文前の器外面のヘラケズリは行わず、ナデないしヘラナデ。

P12 1は三角文を重疊施文した胴部片。施文前に器外面の細かなヘラケズリを行っている。2はまばらな三角文ないしは刺突文を施すもの。浮島・興津式の範疇で捉えられる。

P14 1は縄文3段LRLを施文後、磨削懸垂文を施した胴部片。加曾利EⅡ式土器に比定できる。

P15 1は多截竹管の内側を用い、横位の集合沈線を施文する。浮島Ⅰ式土器として捉えたい。

P19 1は口縁部に斜位気味の条線帯、以下は三角文を施文する。浮島Ⅲ式土器である。

P20 1は三角文を重疊施文した胴部片。施文前に器外面のヘラケズリを行っている。浮島Ⅲ式土器。

P21 1は横位の結節縄文、2は地文縄文2段RLを施した胴部片。ともに前期末葉の縄文系粗製土器。

P22 1は平縁で、口唇上にキザミを施し、その下は三角文を横位に重疊施文する。

P26・30・31・37 遺構間接合資料。集合沈線を横位に施文した胴部片。浮島Ⅰ式になるか。

P31 2は三角文を重疊施文した胴部片。施文前に器外面のヘラケズリを行っている。浮島Ⅲ式土器。

P33 1は三角文を重疊施文した胴下半。施文前に器外面へ斜位のヘラケズリを行う。浮島Ⅲ式土器。

P38 1は振幅のスパンの細かい波状貝殻文を横位に施文した口縁片。

P39 1は口縁が内側に屈曲する。縄文2段RL地文に、浮線文を貼付する。諸磯b式土器である。

P42 1は4本1組の平行沈線で曲線文を描く。浮島Ⅰ式か。2は横位の結節縄文を施した胴部片で、前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。3は縦位の結節縄文を施した胴下半。五領ヶ台式土器。

P44 1は平行沈線を描線として意匠を描くものである。

#### 遺構外出土遺物（第16図）

表採・一括遺物、を含む。縄文式土器は、浮島・興津式166点、諸磯式1点、前期末～中期初頭27点、五領ヶ台式1点、加曾利E式27点、廃土一括47点（峻別せず）、不明48点。石器類は6点。

1～5は平行沈線を文様描線として用いるもの。厳密に見れば全て同じ類型ではないが、大枠で括つてみたい。1は複合口縁で、口唇上キザミを施す。2・4は装飾に爪形文を施している。浮島Ⅰ式土器。

6・7は条線を施すもの。6は粗製土器であるが、7は三角文を沿わせており、飾られた土器である。

8～10は三角文を重疊施文するもの。9は細密沈線を地文とする点で他とは異なるものである。8・10は施文前に器外面のヘラケズリを行っている。これらは、浮島Ⅲ式土器に比定される。

11～13は波状貝殻文を重疊施文する。施文前の器面調整は、ミガキを施すもの（11）、ナデ程度のもの（12）と様々だが、三角文のようにヘラケズリを施す例は少なく、両者の施文原理には相違がある。

14は磨削貝殻文を施すもので、いま磨削部分は狭小で、興津Ⅰ式土器になるか。

15・16は浮線文を貼付したもの。15は浮線が先で、16では地文縄文が先である。諸磯b式土器。

17～22は前期末葉～中期初頭の縄文系粗製土器。22は結節縄文を縦位施文する。五領ヶ台式土器。

23～25は加曾利EⅡ式土器。いずれもキャリバー形深鉢である。25は第8図18の同一個体。

## 2 繩文時代以降

今回の調査で検出された縄文時代以降の遺構は、わずかに中・近世の溝が1条のみである。しかも、ほんの部分的にしか調査が行えず、幅・深さはおろか、断面形状すら詳らかにできなかった。

遺物は調査区全体を含めて、古墳～奈良・平安時代では、土師器33点、須恵器5点で、いずれも小片かつ摩滅が著しく、時代を特定すべき属性は極めて乏しかった。

中・近世では、近世の在地土器の小片が1点のみであり、確認調査も含めて計2点であった。古瓦片も幾つか採集されているが、ほとんどは近・現代のものと判断されるもの（スレート瓦など）で、近世とおぼしきものもあるにせよ、諸般の事情もあって図化はしていない。

それから、瓦の小片の周囲を磨ったか、磨れたようなものが1点あった。ただ、確実に時期が把握できた訳ではないので、「土製品」と判断を下すことができず、図化は見送った。後日、類例が確認されてから、何らかの形で補遺を行っても遅くはないと考えている。今回は存在のみ紹介しておきたい。

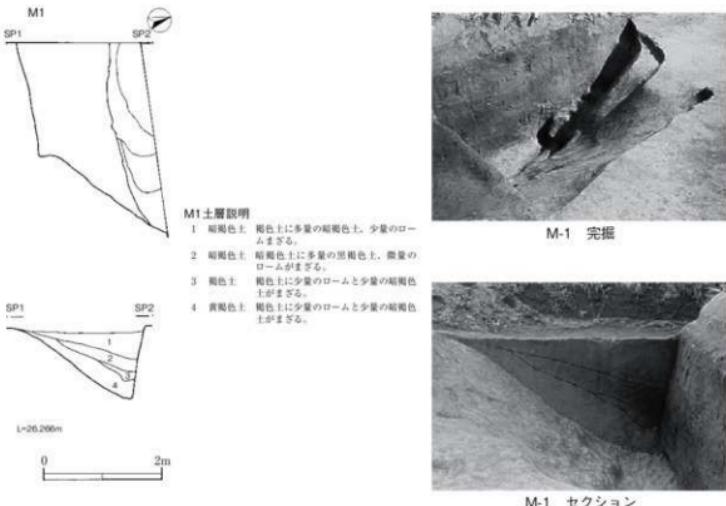
### (1) 溝

#### M1(第17図)

重複関係 単独。形状 不明。確認調査の結果を参考にするならば、略直線状か。壁・底面 壁はごくゆるやかな「V字状」を呈するか。底面は壁面の一部がくほんだ形で、略三段状のテラスを有する。

規模 総延長 (2.30) m、幅 (2.14) m、深さ (1.24) m。覆土 4層に分層できた。自然堆積である。

遺物 縄文式土器片 4点が出土したが、本跡に伴うものではない。



第17図 溝実測図

## 第3章 成果と課題

### 1. D1出土土器群の評価

D1は、炉の部材などに転用された土器を中心に、5個体ものまとった資料が得られた。5個体の構成は、加曾利E式土器のキャリバー形深鉢4個体と、連弧文土器1個体である。D1全体でも、曾利系土器及び大木系土器はほとんど出土せず、かなり純粹な組成を示す。また、縄文前期の土器を除けば、前後の時期の土器を一切含んでいないという点でも、定点を定めるには打って付けの資料である。

キャリバー形深鉢は、全体が窺える資料こそないが、概ね一致した属性を持っている。それは即ち、口縁部文様帯と胴部文様帯の二帯構成で、地文縄文を施してから、口縁部は隆沈線で主文様の渦巻文と楕円形区画文を構成して、これを横位に連携し、胴部は縱位の磨消懸垂文を施文するものである。

筆者は、胴部の磨消懸垂文の成立をメルクマールとして、ローマ数字を用いて「加曾利EII式土器」と認定するスタンスである。それ故、D1炉跡部材転用土器4個体を、加曾利EII式土器に比定し、同住居跡が営まれていた時期を、縄文時代中期後半の加曾利EII式期として位置づけ、同期の八千代市域における、タイム・スケールの定点と定めることを提案したい。

今回は触れないが、加曾利E式土器の研究には長い歴史があり、未だ統一的見解はない。であるからこそ、自分の見解なり、準拠する立場や考え方を明記する必要性があるのではないかだろうか。それは、決して混乱に拍車をかけるものではないと考える。胴部における磨消懸垂文の「磨消」であるが、山内清男博士は「縄紋の抹消」と表記されている。ややこしいのは、博士自身の見解が、「日本先史土器図譜」の時点と、「日本先史土器の縄紋」の時点とでは異なることである。これに関しては、黒尾和久氏の指摘が的を射ており、筆者も、多截竹管の内側を用いて懸垂文を描いたために、縄文がつぶれて見えるものは、「磨消」とは見なさない。従って、これをも「縄紋の抹消」と見なした「日本先史土器の縄紋」の見解ではなく、「日本先史土器図譜」の見解の方を支持するものである。

加曾利EII式に関しては、近年四柳 隆氏が千葉市有吉北貝塚の報文中で、北斜面貝層の基底部と貝層下部という、層位的な背景に基づき、出土土器群を型式学的に三細分した。このうちの第1段階は、磨消懸垂文成立前なのであえて触れないが、第2段階と第3段階は胴部磨消懸垂文が施される時期で、本稿とも関わりを持つ部分である。報文を紐解くと、第2段階では、①連弧文土器が盛行し、かつその文様構成はしっかりとれている、②キャリバー形深鉢の口縁部文様帯は、(主文様)の渦巻文が正円に近く、(副文様)の楕円形区画文で構成されており、胴部には磨消懸垂文が垂下する、③整ったキャリバー形の器形を呈する、などの点を挙げている。第3段階では、①連弧文土器が減少し、その文様構成が崩れる、②口縁部文様帯の(主文様)渦巻文が円文化、全体に文様の施文方法が粗雑化する、③キャリバー形の器形が次第に直線的なものが多くなる、と指摘した上で、加曾利EII式の最終段階に位置づけた。

D1の1・2・11を見ると、口縁部文様帯の主文様は渦巻文であり、胴部文様帯の磨消懸垂文もきっちりと施文されていて、器形的にも整っている。他方で、8・6を見る限りでは、口縁部文様帯下端のヨコ一次区画が不明瞭で、胴部の磨消懸垂文はやや雑である。四柳編年との対応関係は、前者が加曾利EII式第2段階、後者が同第3段階に位置づけることが可能と思われる。

連弧文土器は、燃糸文しを地文とし、口縁部文様帯が交互刺突文、連弧文自体は頸部と胴部の二帯分施しており、胴部の下端からは磨消懸垂文を垂下させる。全体的に見て、ティピカルな連弧文土器と見なしてよいと思われる。きっちりと磨消懸垂文を施文しているので、四柳編年の加曾利EII式第2段階に伴うと解釈される。下総台地では、この段階に盛行するのであるが、本場の武藏野台地や多摩丘陵ではもう衰退していて、ほとんど出土しない。このタイムラグの背景は、今後の争点となろう。

## 2 「土器片囲埋甕炉」の提唱

DIの炉跡は、新旧2基が重複しており、作り替えを示していた。本節で問題とするのは、新炉の方である。以下に特徴を挙げてみたい。

①中央部分に小形深鉢を転用した埋甕が見られる。

②埋甕の周囲を大形深鉢の破片で、二重三重に囲んでいる。

①は、いわゆる「埋甕炉」に該当する属性である。そして、②は、埋甕がなければ、いわゆる「土器片囲爐」の属性そのものであるといえる。DIの新炉は、まさに両者の属性を併せ持つのである。断面観察の限りでは、両者に先後関係は認められず、掘り方を掘削し、土器を設置して、それを固定するべく埋め込む過程で、ほぼ同時に囲いとなる土器片を組んでおり、これもまた、固定と埋め込みを行っている。即ち、「埋甕部」と「土器片囲部」は、密接不離の関係なのである。このような構造、換言するならば属性を持つ炉跡に対し、「土器片囲埋甕炉」と呼ぶことにしたい。

次に、類例があるか否かを検討してみる。以下に内容を記すにあたり、遺構番号を「〇〇号住居跡」という呼称で統一した。ちなみに、挿図は各報告書に掲載されたままの遺構番号を用い、改図・転載している。それから、本稿は論考ではないので、類例の検索を徹底して行ってはいないという点を、予めお断りしておく。脱漏・遗漏に関しては、御寛恕を乞いたい。

第18・19図は、現在のところ千葉県内で検索できた類例のうち、代表的なものを示したものである。いずれも、先に提示した二つの属性を具备していることがわかる。他方で、類例の存在という空間的な分布以外にも、問題点が明らかになってきた。

まず、時期的な問題がある。1. 大網白里町上引切遺跡9号住居跡・2. 市原市奈良大仏台遺跡3号住居跡例は、炉跡を構成するキャリバー形深鉢土器を見ると、胴部は縄文地文に、3本1組の沈線による懸垂文を垂下しており、沈線間は磨消していない。即ち、胴部の磨消懸垂文成立以前であって、筆者は加曾利E I式期と判断する。どうやら、これらが現時点での最も古い例に相当するようである。そして、6. 柏市林台遺跡52号住居跡例は、炉跡を構成するキャリバー形深鉢土器を見ると、器形的にくびれが弛緩しており、口縁部文様帯下端のヨコ一次区画文が不明瞭であり、胴部の磨消懸垂文は幅広となっている。同住居跡の覆土中からは、加曾利E III式に位置づけられる意匠充填系土器・横位連拂弧線文土器が出土しており、前述の土器の属性とあわせ、加曾利E III式期に相当する可能性が高い。なお、図示しなかったが、船橋市新山東遺跡11号住居跡の例が加曾利E III式期に相当し、これらが最も新しい。以上から、加曾利E I式期～E III式期の間に構築・使用されていたことが判明した。

挿図掲載以外で、検索できた類例を列挙する。

加曾利E I式期・・・市原市草刈遺跡（東部地区）P1号住居跡

加曾利E II式期・・・市原市有古貝塚13号住居跡・大網白里町大網山田台No5地点（道円坊遺跡）

23号住居跡・同大網山田台No6地点（一本松遺跡）125号住居跡・139号住・

千葉市中野鶴御堂遺跡2号住居跡・松戸市子和清水貝塚201号住居跡

市原市下鈴野遺跡17号住居跡（埋甕の周りを土器片と石で囲む例）

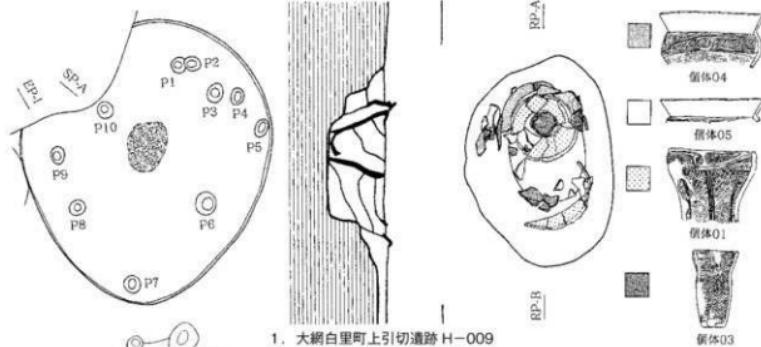
このような形態の炉がいかに出現するかは、課題として残った。

市原市下鈴野遺跡17号住居跡を見る限り、「土器片囲埋甕炉」は、「石囲埋甕炉」とも密接な関係がありそうである。なぜならば、「石囲埋甕炉」の石を土器片に換えた形状と見なすことができるからである。唯一の例を取り上げて、ことさらに強調するのは誤まりかも知れない。しかしながら、埋甕の周囲を石と土器片で囲むという事例は、この種の炉の出現に関する系統や系譜を示唆しているように思われる。

今回は新形態の炉の認識を成果として、結びにかえたい。

参考文献（第18・19回の出典文献を中心とする）

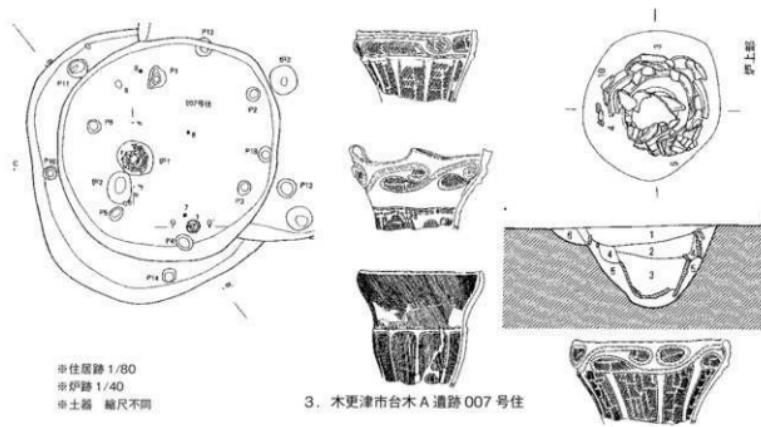
- 八千代市教育委員会 1998 「千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成9年度」
- 青木幸一 1994 「大網山田台遺跡群Ⅰ－縄文時代篇－」 財団法人山武都市文化財センター
- 安藤道由 1995 「台本A遺跡」 財団法人君津都市文化財センター
- 井上文男 1989 「柏市埋蔵文化財調査報告書14－林台遺跡－」 柏市教育委員会
- 大村 直 1987 「下鈴野遺跡」 財団法人市原市文化財センター
- 大村 直 1992 「市原市奈良大仏台遺跡」 財団法人市原市文化財センター
- 折原 繁ほか 1976 「中野僧御堂遺跡」 財団法人千葉県文化財センター
- 上守秀明ほか 2000 「木更津市文化財調査集報4－伊豆山台遺跡・金鈴塚古墳－」  
木更津市教育委員会
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（1）－時間軸の設定とその考え方について」  
『論叢 宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 小林謙一 2003 「多摩・武藏野台地縄文中期集落の文化要素－土器群組成比と炉形態の基礎的分析－」 『セツルメント研究』4号 98頁-138頁
- 高橋博文 2001 「船橋市新山東遺跡」 財団法人千葉県文化財センター
- 鶴岡英一 1996 「千葉市芳賀輪遺跡－平成6年度調査報告書－」 千葉市教育委員会
- 中野修秀ほか 1996 「台前遺跡・上引切遺跡」 財団法人山武都市文化財センター
- 中山俊之 1995 「千葉県印旛郡酒々井町 墓木戸」 財団法人印旛都市文化財センター
- 西野雅人ほか 2003 「千原台ニュータウンⅨ－市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）」  
財団法人千葉県文化財センター
- 八幡一郎ほか 1976 「子和清水貝塚 遺構図版編」 松戸市教育委員会
- 四柳 隆ほか 1998 「千葉東南部ニュータウン19－千葉市有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）－」  
財団法人千葉県文化財センター
- 目黒吉明 1982 「住居の炉」『縄文文化の研究 8社会・文化』 加藤晋平・小林達雄・  
藤本 強編集 雄山閣出版発行 147頁-166頁
- 森 竜哉ほか 2003 「千葉県八千代市 黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書」 八千代市遺跡調査会
- 山内清男 1940 「第Ⅷ輯 加曾利E式」『日本先史土器図譜』 先史考古学会
- 山内清男 1979 「3 紋様と縄紋 3. 磨消縄紋の発生」『日本先史土器の縄紋』  
先史考古学会 52頁-54頁



1. 大網白里町上引切遺跡 H-009

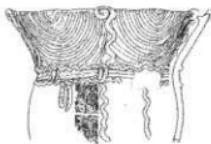
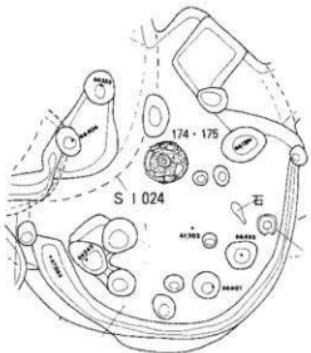


2. 市原市奈良大仏台遺跡 SB03

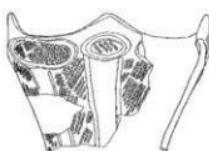
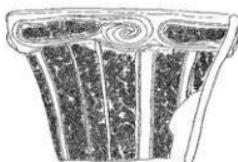
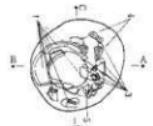
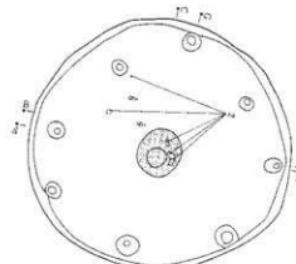


3. 木更津市台木 A 遺跡 007 号住

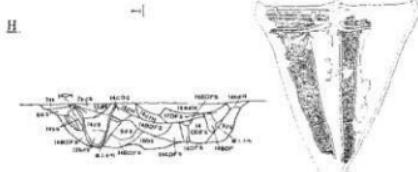
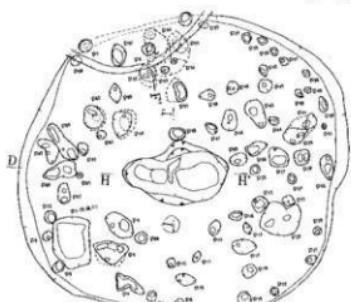
第18図 土器片埋甕炉を有する住居跡 (1)



4. 木更津市伊豆山台遺跡 S1027



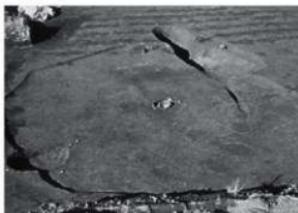
5. 千葉市芳賀輪遺跡第149号竪穴住居跡



6. 柏市林台遺跡52号住居跡

第19図 土器片埋甕炉を有する住居跡（2）

図版 1



D1 炉跡検出状況（遠景）



D1 炉跡（撮影方向が異なるもの）



D1 炉跡検出状況（近景）



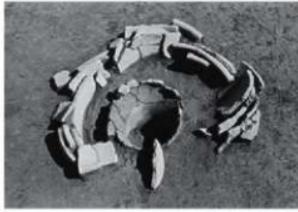
D1 炉跡断面



埋甕と土器片固状況



D1 完堀



埋甕と土器片固状況（拡大）



D3 完堀

竪穴住居跡



P3・P4 完掘



P19 完掘



P4 完掘



P20 完掘



P10 完掘



P21 完掘



P15 完掘



P22 完掘

ピット群

図版3



第6図1



第6図2



第7図4



第6図3



第7図5



D1 炉跡



第6図6



第6図8



第7図9



第7図11 (埋甕)

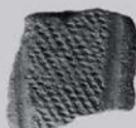
D1出土遺物 (1) 埋甕及び土器片圓部の土器



第8図 15



第8図 16



第8図 17



第8図 18



第8図 19



第8図 20



第8図 21



第8図 22



第8図 23



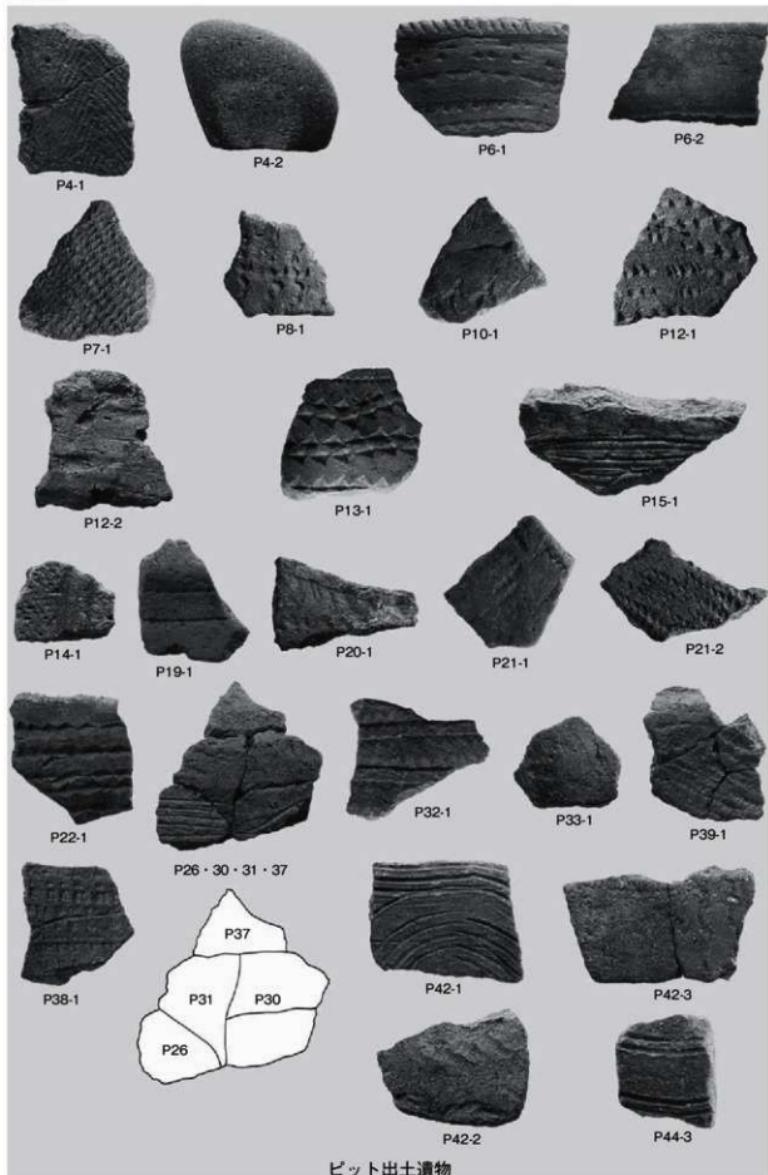
D3-1

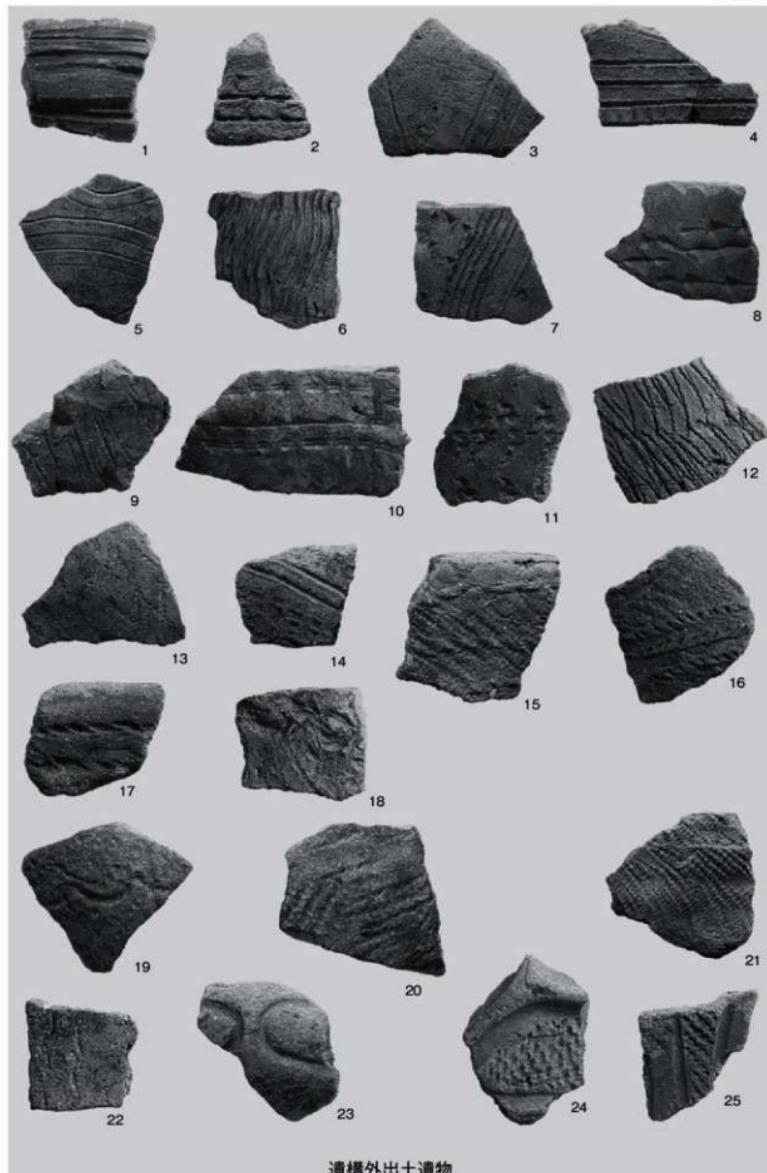


D3-2

D1出土遺物（2） D3出土遺物

図版5





遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しばけんやちよししんばやしいせきしちてん							
書名	千葉県八千代市新林遺跡 c 地点							
副書名	共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	宮澤久史 中野秀秀							
編集機関	八千代市遺跡調査会							
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 ☎047(483)1151代表							
発行年月日	2007年10月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しんばやし 新林遺跡 C 地点	やちよしかみこうやあざ しんばやし 八千代市上高野字 新林1201-1の一部	12221	204	35度 43分 3秒	140度 8分 1秒	19970901 ～ 19971007	470m <sup>2</sup>	共同住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新林遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡2軒、土坑42基、		縄文土器（黒浜式、浮島式、興津式、加曾利E II式）、 石鎚、打製石斧 在地土器		中期の住居跡の 勾の構造が特殊。	
		中・近世	溝1条					

---

**千葉県八千代市  
新林遺跡 c 地点発掘調査報告書  
2007(平成19年)**

印刷日 2007年10月24日  
 発行日 2007年10月31日  
 編集 八千代市遺跡調査会  
 〒276-0045 八千代市大和田138-2  
 TEL 047(483)1151  
 発行 岩井きみ

---